



Weekly Report

小諸浅間ロータリークラブ

- ◆例会日/週火曜日 12:30~13:30 ◆例会場/小諸市鶴巻 音羽
- ◆事務局/〒384-0025 長野県小諸市相生町 1-2-12 エイワンビル 3 階
- ◆会 長 / 橋詰 希望 ◆副 会 長 / 前田 博志
- ◆幹 事 / 黒澤 明男 ◆ガブ広報・情報委員長 / 新井 粒太



2018~2019 年度
国際ロータリーのテーマ

NO. 1449 平成31年3月12日

◆点鐘	橋詰 希望 会長
◆SAA	加藤 輝男 委員長
◆ソング	奉仕の理想
◆ゲスト	曾根 徳隆 様(小諸八幡宮 宮司)

【会長挨拶】 橋詰 希望 会長

先週の創立夜間例会大変盛り上がりしました。望月完さんが入会した日が宴会となって歓迎できましたが、飲まない望月さん、こりずにこれからもよろしくお願ひいたします。

昨日は東日本大震災の日でした。改めて当時の映像を見たり、復興がまだまだ進んでいない様子も分かり心が痛みます。昨年まではこの日の映像をみて客観的にかわいそうだなあと感じていましたが、昨年7月に現地を訪れ3人の子供を亡くした遠藤さんご夫婦にお会いしたり、お母さんのお腹の中にいるときにお父さんを津波で亡くしお父さんを知らない梨智ちゃんに会って、一緒に写真を撮らせてもらったことにより、今年の3月11日は今までの7年と感じ方が違いました。百聞は一見にしかずと本当に思います。

木工業を営む遠藤さんは、東京で修業していましたが、長女はなちゃんが小学校に入る前に転校させるのがかわいそうと思い3人の子供を連れて石巻に帰ってきました。地震当日自宅に戻り、子供3人と母親が無事であったことを確認した後、親戚の安否を心配し自宅を離れました。そのあと津波が自宅を襲い3人の子供を亡くした方です。奥様は別の場所で避難しており無事でした。遠藤さんが一度子供の安否を確認した後、3人の子供を津波で流されて失ってしまったことに、自分を責めたこと、生きていても仕方ないと考えていたことをお聞きました。遠藤さんが中古の黄色い車に乗っていました。子供たちが黄色い車が大好きで、すれ違うたびに黄色い車と叫んでいたのも子どもの好きな黄色い車を買いました、と聞きました。

今流されてしまった自宅のあった場所に、近所の子供たちが集まれる広場を整備し、そこに3体の子供のお地蔵さんが並んでいます。可愛らしい子供のお地蔵さんです。今年も時間を割いて訪問してきたいと思っています。

今日の卓話は、八幡宮の宮司曾根さんをお願いいたしました。曾根さんには八朔相撲の神事では大変お世話になりました。私も親善で玉ぐし奉てんの儀式もさせていただきました。貴重な体験でした。本日はどうかよろしくお願ひいたします。

【幹事報告】 黒澤 明男 幹事

1. 伊藤雅基ガバナーより「2019~2020 年度のための地区研修・協議会」開催について

日時 4月7日(日) 受付 9:00~10:00

本会議・分科会 10:00~16:00

場所 松本大学

2. 週報

佐久・上田東RC

・例会終了後理事会

《本日の配布物》

週報 1447・1448 号、ガバナー月信 3 月号、ロータリーの友 3 月号

◆出席報告 黒田 説成 委員長

会員数 21名 出席義務者 21名 免除者 0名

本日 出席 17名

事前 MU 1名 80.95%

前々回(2/26) MU 0名 75.00%

◆ラッキー賞

NO. 9 朝倉 俊次 君

◆ニコBOX 朝倉 俊次 委員

橋詰 希望君	曾根宮司さん、本日は卓話ありがとうございます。
前田 博志君	宮司さん、ありがとう。
黒澤 明男君	曾根宮司、本日は大変ご苦労様です。お話し、楽しみにしております。
朝倉 俊次君	ラッキー賞、ありがとうございます。

【本日のプログラム】 『八幡宮について』

小諸八幡宮 宮司 曾根 徳隆 様



次週のプログラム: 3月19日「米山奨学生 朴敏貞様送別会」

次々週のプログラム: 3月26日「青少年活動報告」ガールスカウト長野県第17団

1.【現代宗教の定義】

- ①『教祖・創始者』存在(創唱宗教) ②『經典・戒律・教義・規律・規則』整理 ③『礼拝所』を備えている『鎮守の杜』
(手を合わせ「祈り」を捧げる心があれば……「信仰」)

2.【神社神道の役割】

「共同体のまつりごと」個人崇拝・個人救済ではない 家族・親族・氏族・地縁(産子)・民族・国家としての平和と繁栄

3.【自然神・祖先神・田の神・山の神・歳神(正月)様・八百萬神】

『敬神崇祖』神を敬い祖先を崇める心。祖霊神がそのまま守護神・農耕神・水神等となって山と里(天と地)を往来する。

4.【三種の神器】

- ①『八咫之鏡(ヤタノカミ)』 伊勢神宮 御神体(オリジナル) 宮中三殿 賢所 形代(レプリカ)
『天叢雲之劍・草薙之劍(クサナギノツルギ)』 熱田神宮 御神体(オリジナル) 宮中三殿 劍璽の間 形代
『八坂瓊之勾玉(ヤサカノマカガタマ)』 宮中三殿 御神体(オリジナル) 宮中三殿 劍璽の間
②『劍璽承継(渡御)の儀(即位の礼)』 平成31年4月30日 天皇陛下退位 翌5月1日皇太子即位

5.【五大神勅】

- 『天壤無窮の神勅』 日本の国は天照大神の子孫によって治められること。皇室と日本の永遠の繁栄を寿ぐ。
『宝鏡奉齋の神勅』 八咫鏡を天照大神の御神体として地上で祭ること。神宮と賢所の祭祀の淵源。
『齋庭稲穂の神勅』 神の体から生じた稲穂を地上の民に授けるよう命じた。稲作と神道の不可分な関係。
『神籬磐境の神勅』 天上の祭祀と同じく、地上にて神籬と磐境を奉じて国の繁栄と国民の平安を祈ること。
『侍殿防護の神勅』 常に皇孫の側に侍ひて善く防ぎ護ること、守護補佐すること。

6.《神道雑学》

- ①【神典・經典】
古事記 日本書紀 風土記 万葉集 古語拾遺 先代旧事本紀 新撰姓氏録 神道五部書 倭姫命世記 延喜式神名帳
- ② 皇后陛下御歌 『語るなく重きを負ひし 君が肩に 早春の日差し 静かにそそぐ』 象徴天皇の重責
- ③ The First Day of the Year One Line of the Emperors Mt. Fuji.
元旦や 一系の天子(天皇) 富士の山
- ④ 『春にしく時はなく 桜に勝る花はなく 神の道に勝る道なし』 賀茂真淵 作
「神の御心のままに生きる道(惟神の道)こそ 人の進むべき真の生き方である」
- ⑤ 『神道』という言葉が初めて文献上に登場したのは、第31代用明天皇(585)の頃。
『日本』という国号は「大化」(645)の頃初めて使われ、第40代天武天皇(673)の頃より常用。←倭(やまと)
『天皇』という称号が正式に規定されたのは、第41代持統天皇(690)の頃であった。←大王(おおきみ)
- ⑥ 『皇紀2679年』「神武天皇即位(紀元前660年)」『第125代 今上(平成)天皇』
世界史上・人類史上、比類なき皇統の歴史 「世界の奇跡」「人類の奇跡」
- ⑦ 仏法と神道の類似性
「観音とは、根源への思慕であり、根源に還帰しようとする意志である。観音を念ずることは観音の心を心とすることである。それは拝する心が大切だということを教え示している。観音の拝する心と慈悲は、日本の古典における神の心と、機能においても霊威においても、その境を見つけることはできない。」
- ⑧ 天台宗 最高位 天台座主 慈円 『愚管抄』『拾玉集』(鎌倉時代 12世紀末)
「まことには神ぞ仏の道しるべ 迹(あと)を垂(た)るとは何故にかいふ」 「垂迹」(迹を垂れる=形を現す)
仏こそが神祇(日本の神)の姿「本地」であり、神祇「垂迹」は仏が民衆を救済するために姿を変えた仮の姿。
仏法の教え「本地垂迹説」を、仏教側から否定。←「逆本地垂迹説」
- ⑨ 鎌倉幕府 源頼朝 北条泰時 『御成敗式目(第一条)他』(貞永元年 1232)
「我が朝は神国也。」 「神社を修理し、祭祀を専らにすべき事」
「神は人の敬いによって威を増し、人は神の徳によって運を添う」
「神を祀ることは国を治め、国を治めることは神を祀ることなり」
- ⑩ 明治維新 『五箇条のご誓文』(明治4年5月)
「『神社神道』は、『日本の宗祀』である。すなわち国と国民が共通して尊ぶべきものである。」
- ⑪ 敗戦国日本 『神道指令』(連合軍総司令部 GHQ) 『昭和天皇終戦の詔書』(昭和20年8月15日)
「国家神道、神社神道ニ対スル、政府ノ保証、支援、保全、監督並ビニ弘布ノ廃止ニ関スル件」
国家と神社の関係を定めた諸法令は廃止され、「国家の宗祀」としての神社の位置づけは消滅し、
神社は他宗教と同じく、「宗教法人」として存続する以外に選択の道はなかった。
- ⑫ 【聖地巡礼】
エルサレム ローマ アテネ メッカ ガンジス 祇園精舎 伊勢の神宮 高峯神社 神事・祭祀の継続 継続は力なり。
- ⑬ 「女性天皇(八名十代)」 「女系天皇」「女性宮家」
父親を遡れば、初代神武天皇(イザナギ・イザナミ・天照皇大神・スサノ)に辿り着く。「万世一系の皇統」
「種」と「畑」 高品種の稲の種を携えて「国家統一」を果たした「大和朝廷(日本)」の歴史

1.【(全国) 八幡宮 由緒】

①『主祭神』

「**応神天皇(誉田別命)**」「**神功皇后**」「**仲哀天皇**」「**比売神**」

仲哀天皇は日本武尊の皇子で、第14代天皇であり、九州熊襲が再びそむくに及んで、父の命により、神功皇后と共に自ら皇軍を率いて筑前に渡られたが、軍半ばにして香椎の行在所で崩ぜられた。今この地に仲哀天皇と神功皇后を祭った官幣大社香椎(カシ)八幡宮がある。

神功皇后は天皇崩御後その意志を継がれて熊襲の後援者である朝鮮に渡り、これを平定した。

応神天皇は神功皇后の御腹に宿されたまま朝鮮の地に渡り、平定の後、凱旋に際し筑前でお生まれになった。

その後熊襲を従え、大和に帰還した。今筑前にある官幣大社筥崎(ハコザキ)八幡宮は、この応神天皇を祭った神社である。八幡宮として有名な豊前の宇佐八幡宮(八幡本宗)及び山城の岩清水八幡宮は、応神天皇と神功皇后をお祭した神社で共に官幣大社である。鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮を加えて、日本三大八幡宮と称されている。

②『(小諸) 八幡宮』

当八幡宮は、第54代(808年生)仁明天皇皇子滋野親王(本康親王)が牧監として御牧(望月牧)に在任中、

当宮を北御牧下城に建立、その後ここに在城した滋野親王の子孫望月三郎重俊が遺志を継ぎ、これを崇敬した。

天正十八年(1590)、初代小諸藩主仙石秀久が小諸城五万石に封ぜられこの地に移り住み、慶長初年領内巡検

に際して(御鷹狩り)、その尊厳にして神々しく一心をこらして祈れば子宝を得るといふ神威を尊び、慶長十三年(1608)

遂に現在地(小諸)に奉遷し、小諸城鎮護神として、武運長久の守護神として、子宝子育ての神として祭った。

その子仙石忠政上田移封(元和8年(1622))の後も、歴代小諸城主の尊崇を受け、元禄十五年(1702)小諸城主となった牧野康重公以下十世の諸公にも受け継がれ(八幡祭礼)、今日までその歴史は四百年近くに及んでいる。

③『(小諸八幡宮) 八朔相撲』

当八幡宮の「八朔相撲」は、元禄四年(1692頃)、時の小諸城主「石川能登守(乗政)」の命により、奉納相撲(御前相撲)として始められたと伝わる。

祭典大会はその名が示す通り、元は「八朔」八月一日であったが、明治維新以降、九月一日に改められた。

現在は、九月第一日曜日を、「八幡祭礼」「八朔相撲」の例大祭日としている。

荒町全町(荒町・八幡町・紺屋町・三和・東雲・松井)から六歳～十四歳位の子供が土俵入りをする。皆金糸銀糸で繻箔した燦然たる化粧廻しを締め、縮緬の襦袢を着し、福草履を履く。大組二名の横綱にあつては、白と桔梗紫の縮緬をより合わせた綱を腰に廻し、七五三を下げる。行司は肩衣を着し福草履を履き、軍配扇を持つ。子供は年齢により、小組・弓引・中組・大組に分けられ、祭典十日前位から稽古を始める。

祭礼当日、八幡町公民館にて支度を整えた子供たちは、世話人、祭事係、神主の付添と共に、威風堂々とした足取りで町内を一巡(パレード)する。

※ 近年には、「小諸浅間ロータリークラブ」様より、絢爛豪華な化粧廻しが寄贈されております。

神社境内に到着し、向拝にて御祓いを受け、宮司神官の土俵開き安全祈願の神事が執り行われると、いよいよ土俵入り相撲の競技が始まる。江戸時代には小諸城主が家来を随えて、幔幕を張り巡らせた高棧敷から上覧した。子供力士等は、時の殿様に尊崇と忠誠を誓う独特なしぐさで四股を踏み、上覧を壽ぎ、藩の繁栄と安泰を祝った。

相撲競技は三番勝負が基本で、勝者には様々な賞品が用意されているが、その極め付けは、土俵の東西南北と中央に神の神籬(依代)として祀られた立派な八幡幣(はちまんへい)で、優勝した子供力士が巨大な八幡幣を肩に担いで誇らしげに屹立する姿は、まさに圧巻である。

さらにこの小諸八幡宮の土俵には、日本の相撲史上最強と謳われた「雷電為右衛門」も土俵入りを果たしている。そして全国的にも珍しい二重俵構造の「蛇の目の辻(土俵)」が、信州小諸の「八朔相撲」を天下に知ら占める一助となっている。

2.【(小諸) 熊野神社 由緒】

小諸の熊野神社は、承安三年(1173)に、上信国境碓氷峠の熊野大権現(熊野皇大神社)、または紀州熊野三山(本宮)を勧請したもので、最初は古熊野堂にあったが、元禄十六年(1703)に現在の地に奉遷された。

当初より松井川を西の境とする東側(蛇堀川を東の境とする西側)、与良町荒町などを中心とする小諸市街地における東の総産土神として、多くの氏子崇敬者の尊崇を集めてきた。

明治元年にこれまで「熊野権現」と称してきた神号を「熊野神社」と改め、例祭日を八月二十五日と定めた。

氏子区域(与良町・鶴巻・南町・荒町・八幡町・紺屋町・三和・東雲・松井)

『主祭神』

「**伊邪那美命**」「**速玉男命**」「**事解男命**」「**日本武尊命**」

小諸の熊野神社には、江戸元禄・寛保年間の大洪水(戊の満水?)の際、「熊野権現」の化身である「大蛇」が、蛇堀川を下って流れ着き、蛇石や笠石を残したという伝説があるが、全国的にも貴重な八朔相撲の「蛇の目の辻(土俵)」との共通点もあり、まことに興味深いエピソードである。